

## 最優秀賞（「第39回少年の主張全国大会」努力賞受賞）

### 本当の幸せ



弘前市立東中学校 3年 長内 彩奈

「入院することになった……。」

いつも通りにガチャガチャと音を立てて食器を洗う母。

「あ……。」

私は曖昧な返事しかできませんでした。前から母の体調がおかしかったことも、何回か病院へ行っていることも知っていました。ただ、母が大きな病気を抱えていることを認めたくなかったのかもしれませんが、それほど大きなことになるとは思っていなかったのです。徐々に不安がこみ上げてきます。

「入院？もし、このまま母がいなくなってしまうたら……」

母は、入院する前日に、家事について、一から教えてくれました。もうすでに知っていることも全然知らなかったことも、丁寧に順を追って説明してくれます。私はそれを聞きながら、本当にこの世から母がいなくなってしまうのではないかと不安になっていきました。

入院当日、妹は泣きながら母に手を振っていました。私はその横でつとめて平気なふりをして、病室から出ていきました。家につきドアを開けると、そこには暗い部屋が広がっていました。時計は8時を指していました。急いで夕飯を食べ、風呂に入り、宿題をやりました。母が教えてくれたように洗濯物を妹と二人で干し、居間へ戻りました。父も一緒にいてくれましたが、母がいない部屋はいつもの何倍も広く感じられました。寂しさがこみ上げてきました。たった一人家族がいなくてこんなにも部屋が違って見えるのだと知りました。

入院してからたくさんのメールが母から届きました。

「まだ、起きてる？」「学校遅れちゃだめだよ。」「もう夕ご飯食べた？」

メールの文字に母の優しさを改めて感じました。

母の入院は長引きました。私はバスケット部3年生の最後の中体連が迫っていました。妹も小学校でバスケットのキャプテンをやっていました。学校へ行き、部活動が終わり、疲れて帰ってきてから夕食の食器を洗い、洗濯物をたたんで干してを繰り返すうちに嫌になり、妹とケンカする日もありました。妹だって疲れているはずなのに……。妹が泣きながら洗濯物を干している姿を見て私も悲しくなり、「ごめんね」と、二人で泣きながら洗濯物を干す時もありました。母の話をしなが、妹と二人で寝た日もあります。家事の辛さもありましたが、母がいない不安とそれを口にしたら、病院でがんばっている母に申し訳ない気持ちで、心の中が複雑でした。

時間はかかりましたが、母はそのあと退院することができました。母の「ただいまあ」という声が今まで暗かった部屋をぱあーっと明るくしていきました。私はそのとき本当の幸せの意味に初めて気づいたのです。家族がいる幸せ。大切な人がいる幸せ。母は今、とても元気です。

私たちは幸せの中にいると麻痺してしまい、それが幸せなのかわからなくなってしまうのかもしれませんが。母が入院する前は、周りの恵まれた人ばかりをうらやみ、自分が幸せだなんて思っていませんでした。辛さや大変な出来事があると初めて普通の出来事に幸せをかみしめることができるのでしょうか。でも、できるならば、こんなことがなくても日々の幸せを感じられる豊かな優しい心を私は身につけられるようにになりたいです。自分が生きている幸せ、友達がいる幸せ、勉強できる幸せ。この世界は当たり前の幸せがあふれているのです。